

『人権週間プログラム』では、命の大切さ、そして誰もが自分らしく生きる権利を生まれながらに持っていることを再確認していただくために

映画『夕風^①の街 桜の国』の上映を企画しました。

上映後は、監督の佐々部清氏の講演があります。

みなさん、どうぞ奮ってご参加ください！！！！

立教大学人権・ハラスメント対策センター

佐々部清監督：映画代表作

『半落ち(2004年公開)』、『四日間の奇蹟(2005年公開)』、『結婚しようよ(2008年公開)』、『ツレがうつになりまして。(2011年10月～公開中)』など

夕風の街 桜の国



(C) 2007「夕風の街 桜の国」製作委員会

立教大学 2011年度 秋季人権週間プログラム

映画上映会 & 佐々部監督による講演

【会場】立教大学 新座キャンパス6号館3階 N636教室 (ロフト2)

【日時】2011年11月8日(火) 18:15~20:45 (予定)

【対象者】本学学生、教職員、校友、一般

【問合せ】立教大学 人権・ハラスメント対策センター

Tel : 03(3985)3192

Mail : jinken@grp.rikkyo.ne.jp

入場無料
申込不要

この史代 原作 （平成 16 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞, 第 9 回手塚治虫文化賞新生賞を受賞）

■ストーリー

ふたつの違う時代に生きる二人の女性が、今ひとつの物語を紡ぎはじめる

原爆投下から 13 年が経過した広島市街。そこに暮らす平野皆実(麻生久美子)は、会社の同僚・打越(吉沢悠)から愛を告白される。しかし、彼女には家族の命を奪い、自分が生き残った被爆体験が深い心の傷になっていた。その彼女の想いを打越は優しく包み込むが、やがて皆実には原爆症の症状が現れ始める…。それから半世紀後。現代の東京に暮らす皆実の弟・旭(堺正章)は、家族に黙って広島の旅に出る。その父を心配する娘の七波(田中麗奈)は旭の後を追う内に、家族が背負ってきたものや自分自身のルーツに思いを馳せていく……。

『夕凧(ゆうなぎ)の街』

昭和 33 年の広島市街。原爆投下から 10 余年を経て、復興の進んだ街は活気を取り戻していた。母親・フジミ(藤村志保)と二人でこの街のすむ平野皆実は、ある日、会社の同僚・打越から愛の告白を受ける。しかし彼女は、原爆で死んだ妹・翠や父親のことが脳裏からはなれなかった。「どこかで、お前の住む世界はそっちじゃないという声がする……。うちは、この世におってもええんじゃないだろうか?」。自分が生き残ったことに負い目を感じ、幸せに飛び込んでいけない皆実を打越は、「生きとってくれて、ありがとうな」と優しく抱きしめるのだった。ところが突然、皆実は身体に異変を感じ始める…。

『桜の国』

平成 19 年、夏の東京。石川七波は、最近父親の挙動が不審であることを心配していた。今夜も一人、自転車で出かけていく旭をつけてみると、彼は駅で切符を買い始める。その姿を見ていた七波は小学時代の同級生・東子(中越典子)と久々に再会。二人が電車から長距離バスへと乗り換えた旭の後を追うと、目的地は広島だった。七波は旭が広島で立ち寄る先や会う人々を遠目で見ていくうちに、亡くなった祖母・フジミや伯母・皆実へ思いをめぐらせる。

一方、東子は七波の弟・凧生(金井勇太)と付き合っていて、両親から被爆者の末裔であると凧生との関係を反対されていた。自分のルーツと向き合う七波、原爆がもたらした真実を平和資料館で実感する東子。二人は、広島でかけがえのない瞬間を過ごしていく……。



映画『夕凧の街 桜の国』OFFICIAL SITE より引用